



誰もが住みよい地域をつくりたい。
NPO法人の設立から
フリーの場づくり師へ

場づくり師
日置真世さん

聞き手 編集部



長女の障がいをきっかけに親の会の活動に携わった日置真世さん。
やがて活動は生きにくさを感じる人の支援など、より広い地域のニ
ーズを吸い上げる事業へと広がっていききました。NPO法人として設立
した「地域生活支援ネットワークサロン」はソーシャルビジネスとし
ても大成功。いまもさらに変化し拡大を続けています。現在はフリー
の「場づくり師」として活躍する日置さんに地域生活支援ネットワー
クサロンの活動を中心にお話を伺いました。

障がいがあるのは
ショックなこと？

― 出産されたのは学生時代だったと
か。

日置 大学4年生になる直前の春休みに長女を出産しました。普通は産むかどうかを悩んでもおかしくないと言われましたが、私は迷うことなく出産計画を立て、春休みに無事長女を出産しました。

初めての子育てはたいへんでした

けど、すごく楽しかった。ところが1歳半を過ぎてから公園などで遊んでいると、どうもほかの子と比べ発達が遅れているなど感じるようになりました。保健師さんにも専門医の診察を勧められて……。私は「ちょっと面白い子だな」とは思っていました。全然心配していなかったのです。それからいろいろな経緯があるのですが、結局、お医者さんに診てもらったところ「レット症候群」と診断されました。

― それでショックを受けられた？

日置 いえ、まったく。子どもに障がいがあるということでのショックはなかったですね。障がい児のお母さんたちと話をすると多くの人がショックを受けることを知って、「どうしてみんなはショックを受けるのだろう」と不思議に思いました。

PROFILE

●ひおき・まさよ●

NPO法人地域生活支援ネットワークサロン非常勤理事・事務局顧問。札幌市スクールソーシャルワーカー。長女の障がいをきっかけに親の会の活動に携わる。平成12年、NPO法人地域生活支援ネットワークサロンを設立、事務局代表となる。障がい児やその親、生きにくさを感じる人たちが主役となる場づくりに奔走。20年、北海道大学大学院教育学研究院附属子ども発達臨床センター助手。「ウーマン・オブ・ザ・イヤー 2011」を受賞。現在はフリーの「場づくり師」として活躍。

私の反応は一般的ではないと思いますが、もともとそういった感性をたまに持っていただけだと思います。小さいころから、できることできないことといった能力で評価を受けることに抵抗感がありました。私は一般的にいういわゆる優等生タイプの子とも、勉強もできて、スポーツも万能で、周囲に褒められることの多い存在でした。でも、「できること」を褒められるのには違和感がありました。

素のままの自分自身を認められていく感じがしないのですね。「では、私が何もできなくなったら、どうなっちゃうんだろう」と常に考えるような子どもでした。人間の価値は能力で決まるわけではない。もっと違うところにある。そう思って周囲の人に同意を求めたのですが、「あなたは何でもできるから、そんなのんきなことを言えらんだよ」と一蹴されてしまいました。そんなモヤモヤ感は解消されな

までしたが、長女に重度の障がいがあることが分かり、「できない」ことがたくさんあるという事実を直面したときに、ショックを受けられない自分がいたことで、モヤモヤは晴れました。障がいがあるからといって長女が別の人間に変わるわけではない、障がいがある」と知る前も後も自分にとっては同じようにかわいい子どもだったときに、やはり人間の価値は能力で決まるわけではないと確信したのです。

お母さんたちの話もよく聞くと、みんな子どものことはかわいいと思っている。なのに、一般社会の価値観に影響を受けて「この先、どうなるのだろう」と不安になっていることに気づきました。

つまり自分の内側にある感覚ではなく社会的につくられた価値観でショックを受けている。そのことが見えてきたら、「社会の価値観が変われば、余計な心配をしたりショックを受けたり

しなくて済むのではないか」と考えるようになりました。

NPO法人を設立する

平成6年には「マザーグースの会」に入られていますね。

日置 はい。そこは入会の条件がなく、障がい児のお母さんに限らず普通の子育て中のお母さんや保健師さんも入っていて、誰もが出入りできる自由な空間でした。「やりたい人が、やりたいことをやればいい」という文化があったので、すぐく居心地がよかったです。

『くしろ圏育児・療養ガイドブック みんなのゴキゲン子育て』という冊子を作成したり、療育サロンを開設したり、会の活動が面白くて、どんどんのめり込んでいきました。活動が広がっていく中で、「障がい児の子育て」と

いう枠を超え地域のいろいろなニーズに応える事業を始めようと、NPO法人化を目指して平成12年4月に「地域生活支援ネットワークサロン」(以下、ネットワークサロン)として独立しました。子育て相談、親子サロン、地域の学生さんの協力を得て必要な人手を1時間700円で提供する「ゆうゆうクラブ」などを手がけ、その年の12月にはNPO法人として認証されました。

— 法人の社員は何人くらいですか。

日置 いまは160人ほどです。そのうちフルタイムが半分くらい。障がいのある人は25人くらいが雇用されています。それに加えて事業の目的によってボランティアが入ります。事業所は日常的な事業運営はそれぞれ現場の自由裁量で行われるネットワーク型のスタイルで、法人全体の年間の事業規模

地域生活支援ネットワークサロンの事業

就労支援

障がいのある人や生きにくさを感じている人たちに、働く機会の提供や働くための準備の手伝いをする。就業の研修やネットワークサロンで運営するお店での就労など。

子育て支援

子育て中の親や子どもを支援する。児童デイサービス「ぼれっこ倶楽部」、地域活動支援センター「親子の家」など。

個別支援

居宅介護事業、重度訪問介護事業、行動援護事業、移動支援事業の「介護ステーションPASS」など。

通う支援

通所形式で、子どもから大人まで数人から20人くらいの集団で過ごす。日中一時支援事業「生活介護事業所ぼれっと春採」など。

一時的な支援

障がいのある子どもなど世話の必要な人を一時的に預かる。

暮らす支援

障がいのある人や生きにくさを感じている人に住居や食事を提供する。グループホーム「グローバー」、ケアホーム「興津ポレスト」など。

地域貢献

市民活動の応援、人材育成、研修など。集い・仕事づくり・居住の3つの機能をもった、さまざまな人が集う「コミュニティハウス冬月荘」など。

お店

喫茶店「えぶろんおばさんの店」、岩盤浴の店「波動空間 爽」など。

は5億円くらいです。事業の内容は就労支援、子育て支援、居宅介護、重度訪問介護、住居や食事の提供などいろいろです。喫茶店なども経営しています。

―赤字経営にはならないのですか。

日置 なりません。法人税もちゃんと払っています。ただ、人が効率よく動けるようにとか、どんな人でも自分の条件に合うような働き方ができるようにとか、工夫はしていますよ。働き方をその人に応じて相当柔軟にしているところがほかの組織とは違うかなと思います。ネットワークサロンはマザーグースの会の「やりたい人が、やりたいことをやればいい」という文化を受け継いでいます。仕事の量をこなす人もいれば、のんびりやる人もいていい。個々に差があるのは当たり前、その人なりの力を発揮すればいい。そんな雰

したりできる人たちがどんどん増えていきますよ。

母子世帯のお母さんたちも大勢働いています。普通の会社では面接で「子どもを預ける人はいるの？ かぜをひいたらどうするの？」と聞かれて、採用してもらえないような人たちが大活躍しています。

それから、支援の中で出会った生活保護受給者たち。釧路市と一緒に自立支援プログラムを平成17年からずっとやっているのですが、生活保護という枠に入れられて「自分はだめな人間だ」と思い込んでしまった人たちが自分の役割を見つけて元気になっています。

障害のある当事者も働いています。最近増えているのは若者たちです。ネグレクトなどの家庭環境で育っている若者が多いのですが、環境さえ整えれば彼らも元気になって社会を担ったり、自分を表現したりできるようになります。ほかの会社で挫折したとか、

囲気の職場です。組織の縦関係もありません。

―ネットワークサロンが手がけている事業は範囲が広くて全体像がつかみにくいのですが、全体を貫いているコンセプトというか日置さんが重視してきたことは？

日置 一つは多様な文化、考え方、立場の人たちが会おう「場をつくる」ということです。私はこれを「たまり場」と呼んでいるのですが、そこにはいろいろな人たちがいるけれど、解決すべき課題が共有され、肩書を越えた対等なコミュニケーションが可能で、行動を共にすることができる。そうした地域を変える可能性のある場づくりを私は活動の中で一貫して追求してきました。

もう一つは、いままで支援される側にだけ立っていた人たちが、今度はメンタル面で問題を抱えたという人たちもたくさんいます。

会社なので就職の動機には生計を立てることも入っていると思いますが、どちらかといえば自己実現の場を求めてくる人が多いような気がします。

役になり、自分の意見を言ったり力を発揮したりする「場をつくる」ということ。いままで弱い立場にあった人は「弱者」として据え置かれてきました。社会の担い手は力の強い人たちに偏っていると、自分の経験から分かったので、弱い立場の人たちも主役として参加できるようにしたい、それによって社会の担い手を増やしたいと思ったのです。

―そうした弱い立場にあった人たちに働く場を提供している側面があるわけですね。

日置 そうです。障がい児のお母さんはその代表例でしょうね。障がい児がいて社会参加できないのは参加条件だけの問題なので、子どもを預けられるなどサポート体制を整えれば、どんどん社会参加できるのです。いま、釧路では障がい児がいても働いたり、活動

いろいろな人がいて 当たり前

―先ほど「その人なりの力を発揮すればいい」というお話がありました、



世間一般ではそうしたルールだと特定の人に負担が集中したり、「あの人は働かない」と不平を言う人が出てきたりすると思います。そのあたりはどうか考えておられますか。

日置 同質集団だと他人と比較して不平不満が渦巻くのだと思いますが、いろいろな人が集まっている集団ですから互いに違うのは当たり前です。妙な平等観は、私の場合はありません。そのかわり足はひっぱらない、不平があるなら皆の前で表現して一緒に考えようというスタンスです。力を競い合い、損得勘定で動く世間一般の価値観が弱い者を参加させないように閉じ込めてしまったわけですから、自分たちはそれとは違う価値観で活動しようということですよ。少なくとも組織を運営している立場の人間が、個々人の能力に違いのあることを当たり前と思っていれば、あまりトラブルは起きないですね。

インタビューをした場所は地域パーソナルサポート「えにい」。求職、多重債務、心の健康などの相談にパーソナルサポーターが寄り添ってコーディネートする場となっている。地域生活支援ネットワークサロンの活動拠点の多くは釧路市内の小さな建物だ。



また、モチベーションの低いスタッフがいた場合、本人の責任として片付けるのではなく、環境を工夫することによって改善できることはたくさんあると考えています。その人が実力を発揮できる環境をこちらが整えられるかどうかということ。仕事が合っているのか、人間関係はどうか、私生活で深刻な悩みを抱えているかなどを見て助け合いながら働ける職場のほうにそれぞれが力が発揮されますよね。困っていることを周囲にきちんと伝える職場環境を整え、話し合いの文化をいかに築き上げていくかを大切にしていきます。

青写真は描かない

—日置さんは、かねてネットワークサロンのような事業の青写真を描いていたのですか。

—弱い立場の人たちが主役として参加

—弱い立場の人たちが主役として参加でき、地域のニーズが満たされる場がある。そして赤字も出さない——これはソーシャルビジネスの理想的な成功例といえそうですね。日置さんたちの活動に共感し、同じような実践を始めている人たちはほかの地域にいらっしゃるのですか。

日置 私たちの考え方に共感してくれる人たちはたくさんいます。ただ、共感するけれど自分たちが実践するのは難しいとおっしゃいます。そう感じるのは、おそらく常識にとらわれているからではないでしょうか。いままでなじんできているシステムや発想をなかなか手放せないとか……本当に踏み出しても大丈夫なのかという躊躇があるのかもしれない。

私は学生時代に子どもを産み、その

日置 いえ、青写真は一度も描いたことがありません。私たちの活動はいつも地域のニーズが出发点にあります。それに応えようと、不都合なことがあれば取り換え、新しいものを取り入れ、模索を繰り返してきた結果が個々の事業としてあるのです。ネットワークサロンの全体像がつかみにくいのは、明確な設計意図のもとに事業をつくってきたわけではないからでしょう。

事業も増やそうとしてきたわけではなく「ほかにやってくれる人がいれば、私たちはやらなくてもいい」というのが基本スタンスだったのです。でも、そういう人はあまりいませんでしたし、困っている人は地域にたくさんいたので、行きがかり上、事業が増えませんでした。ただ、会社が大きくなったことで、今度は雇用の場としての期待が大きくなりました。今は全国的に雇用が厳しい状況ですが、釧路では特に職がないのです。雇用を生み出

まま主婦になったので、会社勤めを経験していません。ですから組織とこういうものとか、社会はこういう仕組みで動いているのだという既成概念にとらわれず、NPOの活動を始めることができました。それから、NPOを始めて間もなく離婚したことも、一つの要因かと思います。何せ、障がい児を含めた娘3人を養っていかなくてはならないわけですから、雇用を守ることは自分の生活を守ることと直結していましたから。

—地域のニーズを吸い上げ、事業化していくのは保健師の活動と重なります。保健師についての印象は？

日置 保健師さんは大変頑張っておられますね。子どもだけを切り離してとらえたり、能力的な部分だけを見たりする専門職が多い中で、個人を家族関係の中でとらえたり、システムの中で

とらえたりする保健師さんはネットワークサロンと理念を共有しやすい職種だと思えます。ただ、場合によっては医学モデルを引きずって「こうあるべきだ」と指導しようとされることもあります。また、行政の組織的な限界があつて、頑張りきれない、やりにくいのだらうなと思うときがあります。

一人ひとりを尊重する文化

—先ほど「写真を描かない」ということでした。今後のビジョンを聞くのは愚問のようですが、あえてお尋ねします。

日置 そう聞かれたら「いろいろな人がきちんと自分の思いを伝えられる場をつくりたい」と答えるだけです。ビジョンとか理想を描くと、それにとられて苦しくなってしまうから

されたし、ソーシャルビジネスの成功者のように言われることに抵抗があつて……。組織の中心にいと、「日置さんのネットワークサロン」のように言われてしまうのが嫌で平成16年ころから脱出を企てていたので(笑)。20年によくやく代表を離れられたときにはすごくうれしかったですね。私が必要なのは、特別な能力が必要なわけではなく、仕組みと基本を押さえていれば誰にでもできると思つています。一人でできないこともあるので、何人かで分担することもあ

ね。

でも、絶対に悪いほうにはいかないという確信はあります。「もつと良い地域にしたい、もつとまじな人生を送りたい」と誰もが思っているはずなので、一人ひとりのその思いを引き出し、表現すれば悪いほうにいくはずがない。悪くなるとしたら、そういう表現ができないように封じ込めているだけだと思つています。

—かなり性善説ではありませんね。

日置 性善説ですね。人間には当たり前前に善の部分と悪の部分があつて、その善なる部分の可能性にかけるという意味での性善説です。今までその確信のもとにやってきました。失敗したことは一度もありませんし……。とはいつても、仕事には責任が生じるので、集団特性に応じたルールづくりは必要ですが。しかしそのときも、人を信じていることが

ります。まず、メンバーの特性を生かし、全体の中で個々人が機能する仕組みをつくることです。リーダーが「この人はできる、あの人はできない」と評価してしまうと、組織のベースが崩れ、うまく機能しません。そして一人ひとりを尊重する文化と対話が基本です。そういう価値観を組織のみならず、いかに共有できるかがポイントです。いまの社会は弱い立場の人たちの可能性を奪ってしまう構造になつていきます。でも、大きな社会全体をいきなり変えることは難しい。そこで、私たち

まず土台にあり、かわる人たちがよく話し合つて、民主的に合意形成しながらルールを構築するのが基本だと思つています。

最初から「組織はこうすべきだ」と決めてかかるとか、正解があると思つていたのでうまくいきません。人や状況が変わると、やるべきこともどんどん変わっていきます。私たちが目指すものに完成形はないし、組織のルールも常にみんなで見直さなければならぬと思つています。

—ところで日置さんの名刺の肩書はフリーの「場づくり師」となつていますが、ネットワークサロンの代表からは離れられたのでしょうか。

日置 はい。組織のシステムがある程度できた段階で、私は抜けました。いまでもかわつてはいますが非常勤です。活動がいろいろなメディアで報道

は自分の身近なコミュニティーを従来の枠組みとは違った視点と価値観で再構築してみ、そのほうが実はみんなが元気になることを証明しているというところでしょうか。

日置真世さんの本

日置真世の
おいしい地域(まち)
づくりのためのレシピ50



《発行》
全国コミュニティライフ
サポートセンター
◎
19×15cm・296頁
2100円(税込み)

●編集部から●

誌面の都合上、ここではソーシャルビジネスとしてのネットワークサロンの話だけに絞りました。日置さんは神出鬼没で、その活動量は膨大です。ネットワークサロンのホームページやブログをぜひご覧になってください。

NPO法人地域生活支援ネットワークサロンのホームページ
<http://n-salon.org/>

◎
日置真世さんのブログ「緩やかな市民革命の部屋」
<http://n-salon.org/hioki/>